

あるドイツ人博物学者が見た 1882 年の「博物館」 新発見のクバリー氏意見書から

J. S. Kubary's newly found proposals and opinions in 1882
submitted to The Museum, Tokyo

西川 輝昭 (NISHIKAWA Teruaki)¹⁾

1) 名古屋大学博物館

The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

Abstract

John Stanislaw Kubary (1846–1896) was a German naturalist and ethnographer, born in Poland, who lived a stormy and eventful life mainly in the West Pacific islands. He is known to have worked for the Museum Goddefroy as a collector of natural and ethnographical specimens for about 10 years from 1869. According to his detailed biography written by Paszkowski (1971), Kubary stayed in Japan for 4 months from April to August in 1882, working “for a while for the Museum at Yokohama and later for the Tokyo Museum”. However, further information about his days in Japan has remained unavailable. Recently, among the early documents kept in the Tokyo National Museum (successor of The Museum, Tokyo), I happened to find his three Opinions (Japanese texts) submitted to the Museum, Tokyo during his three months’ employment as a specialist in zoology there (from the 1st of May to the end of July). The opinions include his comments and practical proposals to improve museum activities for display, collection of materials, and exchange of scientific information with foreign countries. The documents are significant not only because they represent the first record of Kubary’s days in The Museum, Tokyo, but because they give some historical information concerning details of museum activities in Japan in 1882. Thus, the entire text of the opinions are reproduced, and brief notes and comments are given.

はじめに

クバリー (John Stanislaw Kubary, 1846-1896; ファーストネームが Jan あるいは Johann と表記されることもある; 図 1) は、ポーランド生れのドイツ人博物学者・民俗学者で、ミクロネシアを中心に広く西太平洋の島々に暮らした。彼は 1882 (明治 15) 年、日本に短期間滞在したとされるが、その具体的な日常はこれまで全く判っていなかった。著名な昆虫学者で科学史家の江崎 (1984; 初出は 1940 年) が、文献や日本にある古い書類の中に「未だ彼の記録を発見することが出来ず、果たしてこれが事実か否かに、なお多大の疑問を」呈しているほどである (p.83)。管見の限り、120 年余を経てここに紹介する「クバリー氏意見書」が、彼の日本における活動を垣間見ることができる初めての資料ということになる。これは、彼が「博物館」(正式名称) 英語では “The Museum, Tokyo” などと表記され、いわゆる内務省系博物館として今日の東京国立博物館に連なる系譜の出発



図 1 クバリーの肖像
(Panning, 1958 より転載)

点近くに位置する に、1882年動物の専門家として3ヶ月間勤務していた間に提出したものである。

外国人による日本の博物館論としては、かのシーボルトの次男であるヘンリー・フォン・シーボルトが1875(明治8)年に執筆したものが知られているが、その対象は考古学博物館に限定されている(椎名, 1989)。他方、クバリーの意見書には、おもに動物について、その標本展示や採集、あるいは学術情報収集などに対する改善の提案が細くなされている。先進博物館の実情に通じた博物学者の目に、国立の「博物館」動物部門は、いったいどのように映ったであろうか。

クバリー氏意見書の概要

東京国立博物館資料館においてマイクロフィルムで閲覧に供されている1882(明治15)年の『農商務省博物局動物録』中に、7月26日付「六等属田中房種」起案の省内回覧文書がある。この文書は、『動物録』の目次に「独逸国人『クバリー』ノ動物ニ関スル意見書」と題されているが、ここでは「クバリー氏意見書」と呼ぶ。版心に農商務省と印刷された縦書き罫紙11丁に記入され、袋綴じされている。原文はすべて同一の筆跡で、読みやすい楷書である。句読点なしの漢字カタカナ交じり文で記されているが、以下の引用や全文再録にあたって旧漢字を当用漢字にかえ、句読点を適宜補うなどの改訂を施した。

クバリー氏意見書の冒頭にある回覧済みを示すと思われる書き込みや記号を、『明治十五年五月改正官員録』および東京国立博物館(1973a)と照らし合わせると、この文書が農商務省の首脳部を含む関係者に回覧されたことがわかる。すなわち、卿(長官)である西郷従道こそ見ていないと思われるものの、輔(次官)である品川弥二郎をはじめ、書記局長兼庶務局長の宮島信吉、庶務局の一等属である長瀬義幹、博物局長代理で天産課長兼農業課長の田中芳男、工芸課長兼芸術課長の山高信離、庶務課長の片岡忠教、そして史伝課長兼図書課長の黒川眞頼に回覧されている(博物局に設置が定められている全9課のうち、言及しなかった残り2つは当時欠課)。他方、同『官員録』によると博物局には属およびそれ以下の23名が籍を置いているが、意見書が回覧されたのは、そのうち、六等属の野村重治、御用掛准判の中島仰山、それに『官員録』に掲載されていない「月羽」氏だけである。これらの人々は、起案者の田中房種とともに動物部門の関係者かと思われる。

クバリー氏意見書は、回覧起案者である田中房種が執筆したと思われる無署名の「クバリー氏意見書回覧の主意」に続き、「クバリー第一意見書」、「第二意見書」、および「第三意見書」から構成されている。後に述べるように、クバリーは「博物館」の動物部に、1882年5月1日から7月末までの3ヶ月間勤務した。第一意見書は1882年5月付であるから勤務開始まもなく執筆されたことになるが、「博物館」の展示に関する意見を求められたのに応えて、具体的な改善提案を詳細に記したものである。また第二意見書には日付がないが、第一と第三の間に書かれたと考えられ、収蔵標本の充実のため、旅費は自弁でよいから国内採集旅行に派遣してほしいと要望している。さらに、第三意見書は、同年7月付けで(文面に「在勤の二ヶ月中」に痛感した云々とあることから月の始めであろう)、日本産動物の研究業績を網羅的に集めるため、またその研究の進行状況を逐一把握するため、「外国通信補助員」というような正式な外国人ポストを設けることを提案し、最低1年間、自分をそれに当ててくれるようにと要望している。

しかし、「回覧の主意」が示すように、「事皆費額に関し当今の情勢には少しく適し難きを以て」、つまり予算不足を理由に、雇用の延長は認められなかった。田中房種による回覧起案の日付が1882年7月26日となっていることから、延長なしとの決定がなされた直後、本文書が省内に回覧され始めたことになる。「回覧の主意」にある「止むを得ず其出席を謝絶したり」との文言ともども、田中による一

種の抗議とも受け取れる。

さらに、第三意見書の後に、おなじ筆跡で以下の文章が見られる。「別紙回議大輔手元に之有り候に付御返却致す可き旨宮島書記官申聞に付即ち御返戻[に]および候也 六月五日 書記局 博物局御中」(鍵括弧内は引用者の注記、以下同様)。この日付は、回覧を起案した翌年、つまり1883年のものと考えることができる。理由は不明だが、回覧を終えた後かなり長い間、農商務省の大輔、つまり品川次官の手元に置かれていたことになる。

なお、クバリーによって書かれた意見書原文(おそらくドイツ語であろう)を探索しているが、まだ発見に至っていない。

クバリーの略歴と日本における足跡

クバリーの略歴を、その最も詳細な伝記である Paszkowski (1971) によって述べる(江崎(1984; 初出は1940年)にもかなり詳しく記述されているが、双方に多少の食い違いがある)。1846年11月13日にポーランドのワルシャワに生れる。1863年から翌年にかけておきた反ロシア蜂起に関与し、その結果として国を追われて無残とも悲惨ともいえる体験をヨーロッパ各国で味わったあと、1869年、ドイツはハンブルクのゴッデフロイ博物館(Museum Goddefroy)派遣の西太平洋における採集人として5年間の契約を結んだ。この博物館は太平洋熱帯海域における交易で大成功したゴッデフロイ商会によって私的に設立され、ハンブルク国立動物学博物館を経て、現在のハンブルク大学附属動物学博物館となる流れの源流近くに位置する。

クバリーは、西太平洋の島々でたくさんの新種を含むさまざまな動植物、鉱物、あるいは民俗資料を採集してハンブルクに送ったのはもちろん、民俗学的・地理学的調査も精力的に行った。ポナペ島の巨石遺跡ナンマドール探検はそのほんの一例である(図2)。こうした活動が高く評価されて5年間の再契約を1875年に結び、島々をめぐる日々は続けられた。1875年にポナペ島でプランテーションの経営



図2 クバリーが探検したポナペ島のナンマドール遺跡(1982年7月、筆者撮影)

を始めたが、これが後に彼の生活の糧となる。すなわち、1879年、トラック諸島滞在中に、ゴッデフロイ商会の倒産によって失職したからである。

1882年初頭、このプランテーションが台風などで壊滅的な被害を蒙ったことから、日本で職を見つけようとしたが果たせず、また折から話の出ていたライデン博物館との契約も夢と終わり、失意のうちに戻ったポナペ島でクバリーは、名誉酋長として暖かく迎えられた(この厚遇は、1872年のインフルエンザ流行時、彼が、かつて医学部に短期間在籍していた経験を活かして島で治療に尽して以来、住民から絶対的信頼を寄せられていたことによる)。その後も波乱の日々の中で標本採集や調査を続けたが、ついに定職に就くことなく、晩年は心臓病を病んだ。ポナペ島の自宅にある長男の墓に寄り添って亡くなっているのが発見されたのは、1896年10月9日のことであった。死因は不詳とされる(Stocking, 1991)。

さて、Paszkowski(1971)による伝記には、クバリーの日本における足跡が、「横浜にある博物館the Museum at Yokohamaでしばらく働いた後、東京博物館the Tokyo Museumに勤務したがまもなく解雇された。彼の日本滞在は4月から8月のたった4ヶ月だけだった」と記されている。それに続けて、この伝記の著者が1966年に東京でクバリーの就職と解雇に関する調査をしたが情報は得られなかったため、この間の事情は友人二人の間の1882年8月18日付手紙から推測するしかないとして、それを次のように英訳して紹介している。「クバリーは、ドイツ領事the German consulの影響のおかげで横浜の博物館Museum of Yokohamaで臨時的な職につくことができた。この博物館の同僚はだれも、ヨーロッパ人と一緒にやるのをひどく嫌がっていたので、この職を手に入れるのには大きな圧力が必要だったのだ。クバリーからの手紙によれば、自分は同僚たちすべてと大変うまくいっており、そこで必要とされて恒常的な地位につけるようにベストを尽くそうと思っている、とのことだ。しかし彼が成功するかどうかは大きな疑問だ。」この手紙にある「大きな圧力」が彼の「博物館」就職にも奏効したことは、今回紹介する新資料の記述からもうかがえる。

なお、クバリーの名前はお雇い外国人の一覧記録であるユネスコ東アジア文化センター(1975)にもまったく現れないし、ガゼット類にも発見できない。後者については、滞在がごく短期間であったのがその理由であろう。他方、前者の一覧に現れないのは、「博物館」への雇用が正式なものではなかったことを示すのかもしれない。

クバリーの日本滞在当時、東京に博物館と名のつく施設は、「博物館(いわゆる内務省系博物館、前述)以外にもうひとつあった。それは、今日の国立科学博物館につながる、いわゆる文部省系の「東京教育博物館」(それまでの「教育博物館」から1881年に改称)である。今回の新資料により、上記の伝記にある「東京博物館」は前者、すなわち内務省系博物館であることがはっきりしたわけである。それでは、「横浜にある博物館」は何に当たるのだろうか。可能性としては、1880年4月に創設された「神奈川県物産陳列場」が考えられる。これは横浜公園内に建てられ、「所謂今日の商品陳列館の濫觴とも云うべきもので、其当時は本邦随一のものであった」が、1882年に廃止された(横浜市役所、1973, p.381)。クバリーは、この「横浜の博物館」に勤め、その廃止に伴って東京の「博物館」に移ったとも推定されるが、それを確かめる資料はまだ発見できていない。

上述したクバリーの来日や離日の事情は、「クバリー氏意見書回覧の主意」にある記述と矛盾しない。それによれば、クバリーはドイツのゴッデフロイ博物館に依頼されて動物学的研究のために数年間太平洋諸島を訪れた後、1882年に初来日した。そして彼は、ドイツ公使による農商務省次官品川弥二郎への斡旋により、5月1日から3ヶ月間の期限付きで「博物館」の天産課に動物の専門家として雇用された。クバリーは勤務に精励し、3つの意見書も執筆し、雇用の延長を希望したが果たせなかったため

ある。Paszkowski(1971)が8月に離日したとしているから、クバリーは延長なしとの結論を聞いて、早々に日本を離れたものと思われる。

ドイツ公使の斡旋をうけたとされる品川弥二郎(1843-1900)は、1870年から1876年までヨーロッパ各国に滞在してドイツの政治体制に魅せられ、帰国後は「独逸同学会」およびそれを発展させた「独逸学協会」の中心として、「ドイツ学」の振興のために熱心に活動していた。こうした縁から、ドイツ公使とも交流があったと思われ、上記の斡旋につながったものと推測される。

クバリーの見た「博物館」 意見書の要旨と解説

(1) 第一意見書

この意見書は、おもに動物関係の展示を取り扱っている。それで、意見書の紹介に入る前に、クバリーが勤務した1882年5月から7月、「博物館」の施設設備がどうなっていたかを振り返ってみたい。東京国立博物館(1973a, b)によると、かつて「博物館」は、現在の帝国ホテル(東京都中央区幸町1-1-1)付近にあって、「内山下町博物館」とか「山下門内博物館」と通称されていた。しかしクバリーが勤務をはじめた頃にはすでに、上野公園内旧寛永寺本坊跡地に本格的な施設が完成して、移転も完了していた(開館式は1882年3月20日)。本館はレンガ石積造2階建ての建物で、当初から博物館として使用する目的でコンドルが設計し、1878年3月から2年余をかけて新築された。竣工後の1881年、折からの第2回内国勸業博覧会で美術館として使用されたが、その後晴れて「博物館」が本館として使用するようになったものである。この本館に付随して、レンガ造り平屋建ての第1附属館と木造平屋建ての第2附属館があった(この3館はいずれも関東大震災で大破)。2つの附属館はもともと、1877年の第1回内国勸業博覧会のために、第1の方は美術館、第2は機械館として建てられたものである。第1附属館は、将来的に博物館に転用することを見込んで、恒久的な建造物としてレンガ造りが採用された。

「博物館」において、天産部(動物、植物、岩石、鉱物、化石を所管)は第1附属館を占めていたとされる(東京国立博物館1973b, 付表「平常陳列変遷一覧」参照)。なお、この第1附属館の展示面積は75坪、第2附属館のそれは300坪程度と見積られる(東京国立博物館, 1973a, pp.189-190参照)。上野公園移転後の1883年12月現在、天産部の展示面積は「211坪38」となっているので、第1附属館だけでは計算があわないことになり、木造の第2附属館の一部も天産部が使用したのではないかと思われる。その根拠となるのが、以下の「禽類部」の記述である。前置きはこれくらいにして、本題に入る。

意見書はまず「禽類部」について、来館者用通路が土に石灰を撒いただけの「たたき」になっているために舞い上がる埃の害をのべ、当面の改善策として筵を敷くことを提案している。床がたたきというのは、前述のレンガ造りの第1附属館では考えにくい。他方、第2附属館は建設当初「床面はな」だった(同, p.190)。その後も床張りせずに使用され、そこに「禽類部」の展示があったのであろう。これは、当時の「博物館来観人心得」に「木履下駄及草履ヲ穿チ又ハ杖傘裏物類ヲ携へ館内ニ入ルコト勿レ(但第二附属館ハ此ノ限りニアラズ)」とあって、第2附属館は例外的に下駄や草履といった靴以外の履物も許容されていたことからもうかがえる(東京国立博物館, 1973a, p.209)。

さらに、「禽類部」の展示品には、破損したり、標本同士やガラスケースとの接触によって傷んでいるものもあったようで、その改善を訴えている。また、産地ごとにラベルの色をかえる工夫が提案されているが、その記述からみると、日本国内ばかりでなく、「亜細亜産...欧羅巴産...亜米利加産」の鳥類も展示されていたことになる。すでにこの時期の「博物館」が、交換によってこうした標本を収集して

いたことはよく知られている(たとえば、東京国立博物館，1973b 所収の「内務省・農商務省博物局年報」を参照)。また、剥製の出来が必ずしもよくなかったようで、剥製技術者の養成の必要を述べている。日本における剥製技術の画期は、坂本福治による「坂本式剥製法」の完成であるといわれるが、それはどうやらクバリーの東京滞在時よりも後だったらしい。坂本は博物館や大学に魚鳥を納入していたが、「明治13年頃、博物館にあった外国の剥製を見て、自分も作ってみようと思ひ立ち」、飯島魁東京大学教授などの指導もうけて苦心の末、「坂本式の基礎を作った」という(橋本，1977，p.244)。

鳥類以外の動物も剥製で展示されていたらしく、これらは、大型のものは別としても、アルコール液浸が望ましいと述べている。

魚類については、標本の大きさによらず同じサイズのラベルを付けているから、それによって展示品が隠され、あるいは隣の標本にかかるなど不体裁であることが指摘されている。

次に動物の全般にわたり、日本産標本の収集を積極的に行い、国内産を網羅するとともに、海外の博物館との交換に役立てることを提案している。標本採集については、第二および第三意見書でも繰り返し強調されており、以下の第二意見書の項でまとめて考察する。さらに、展示標本の種名が未決定である例が少なくないことを批判し、外国文献で調べるか専門機関に送付して、すみやかに種名を決定することを勧めている。ちなみに、日本列島に産する動物を日本人が自ら新種記載して新しい学名を提唱することは、クバリーが日本にいた時代よりもやや後、ようやく1900年前後から盛んになったのである。意見書はまた、動物の写生をする画家たちの作品について、巧みではあるが学術的にみると物足りないことを指摘している。

最後に、史伝工芸部の展示は外国人が最も注目するものであるから、その欧文解説書を作成すべきであり、自分もそれに協力すると述べている。この正当な提案がいつごろ実現することになったかは未詳である。とはいえ、「博物館」に外国人への配慮が全く欠けていたわけではない。「入館案内」は中国語、英語、ドイツ語でも掲示されていた(東京国立博物館，1973a，p.210 参照)。

なお、この意見書にある「ブラキストンの話に拠れば近頃全き日本産禽類目録刊行の由なれば」という記述から、クバリーが、北海道の函館を根拠地として活動していたイギリス人実業家で博物学者のブラキストン(ブレイキストン) Thomas Wright Blakiston となんらかの交流があったことがうかがえる。ただし、ブラキストンの伝記(上野，1968；彌永，1979)にクバリーは登場しない。

(2) 第二意見書

近年外国人によって日本産動物の新種が記載される例が実に多いにもかかわらず、そうした文献類は「博物館」にほとんど揃ってない。これを改善するには、日本産動植物の目録や解説書を欧文で出版し、それと交換に文献を入手することである。こうした目録を出版するには、「博物館」の収蔵標本は現在あまりに乏しい。したがって、私クバリーを、旅費は自弁でよいから国内採集旅行に派遣してほしい。重複品は、海外博物館との交換に資することができる、と主張している。

「博物館」やその前身における国産標本の収集活動は、クバリーには極めて不十分に映ったであろうが、前進がなかったわけではない。たとえば、天産品は1876年に1万3千点余であったが、それからほぼ4年間で4万3千点余増加し、その64%を博物館職員による採集品が占めている(東京国立博物館，1973a，p.151参照)。これは決して少ない数ではない。それでは、そのための費用はどのくらい支出されたのだろうか。博物から美術工芸までの分野をカバーする博物局全体の1882年予算(同，pp.231-232)を見ると、総額33,276円のうち「内国旅費」がその1%強、400円となっている。これは入館料最高額5銭の8000倍にあたり、現在の東京国立博物館の入館料420円から単純に計算すると今日の336万

円となるが、この金額の評価は容易でない。なお、外国人による国内採集旅行の例については、以下の「第三意見書」の解説も参照されたい。

参考までに、前述した文部省系国立博物館である「東京教育博物館」における博物標本の採集活動について、簡単に触れておきたい。こちらの方がはるかに詳細な資料に触れることができるが(国立科学博物館, 1977, 表16参照), たとえば, 1882(明治15)年には18人・週, 1883年には約12人・週, 1884年には約40人・週, などとなっている。ただし, 採集品の相当部分は, 全国のいろいろな学校に教育用に提供された(1883年には文部省から, そのための標本制作費として1500円が特別に措置されている)。

(3) 第三意見書

「博物館」, とりわけ, 私クバリーが属する動物部について, 日本を代表する博物館として, 諸国の一流の博物館との交流によって質の向上を図るべきである。それにはまず, 自国の動物相を網羅する標本を収蔵し, 次に外国産標本を整備することである。創設以来日の浅い「博物館」の困難さは理解できるが, 国内標本の採集について, 残念ながら外国人による活動が日本人のそれをはるかに凌ぐことは周知のとおりである。その結果, 日本産既知種(すべて外国人によって発表されたもの)のうち, たとえば鳥類の「博物館」収蔵標本はその半数にすぎず, 甲虫類ではわずかに5分の1にすぎない。

こういった状態を克服する第一の手段は, 既往の研究を熟知することである。そのためには, 外国人による既往の文献を集めなければならない。この背景があってはじめて, 日本産標本における新種発見が可能となる。次に, 自国の標本だけでなく, 広く世界の標本を収集すべきである。その際, 日本産の重複標本が交換に使える。これを遂行するには, 海外の博物館や博物学者と恒常的な文通関係を結ぶのがよい。それには「博物館」動物部に, 数ヶ国語に通じ, また事務に熟達した外国人を雇用する「外国人補助員」というポストを設置してはいかがか。私クバリーは, 当館で2ヶ月勤務してこうした職種の必要性を痛感した。当局がその必要性を認めるのであれば, 他ならぬ私をその職に任じていただきたい。その場合, 私はまず, 外国人による日本産動物の文献を集めるための枠組みを作成するところから着手したい。外国との通信に60日余りかかる状況では, この事業を一応成功させるには, 少なくとも1年間が必要である。

この意見書は, すでに述べたように, 実を結ばなかった。これはしかし, 明治初年の博物館が外国人職員を排除していたことを意味しない。いわゆるお雇い外国人を専門家として雇用して、「太政大臣に届けて正式に雇用した例」としてイギリス人プライアーとアメリカ人モースがよく知られている(椎名, 1989)。もっとも, 彼らを雇用したのは, 内務省系ではなく, 文部省系の「東京博物館」とその後継の「教育博物館」であるが, 蝶類の専門家であるプライアー(Henry James Stovin Pryer)は1876年から翌年にかけて標本採集を目的として雇用され, 国内採集旅行を行っている。ユネスコ東アジア文化センター(1975)によれば彼は, 1876年7月から3ヶ月(月給75円), そして翌1877年当初から1年間(月給60円, ただし5月で依願解約)の契約を結んでいる。クバリーはこのプライアーの例をおそらく知っていて, 採集人としてよりはむしろ外国の研究情報収集のためということで, 自分を売り込んだのかもしれない。クバリーが「数ヶ国語に通じ」ていたことは事実で, 母国語であるポーランド語のほか, ドイツ語とフランス語で業績を公刊している(Paszkowski, 1971)。彼が語学の才能に恵まれていたことは, 西太平洋の島々の違った言葉を簡単にマスターしただけでなく, それらの分類までも論じていることからもうかがえる(同)。

謝 辞

原稿を校閲し有益なご助言をくださった磯野直秀慶応大学名誉教授と査読者加藤鉦治名古屋大学教授，英文要約を校閲していただいたE. Cutlerハーバード大学教授，ルイスの日本甲虫目録についてご教示くださった鈴木邦雄富山大学教授，資料を閲覧させていただいた東京国立博物館，横浜開港資料館，国立公文書館，外務省外交史料館，名古屋大学附属図書館，の各位に深謝する。

文 献

*) 直接参照できなかった

Blakiston, T. and Pryer, H. (1878) A catalogue of the birds of Japan. *The Ibis*, 4th ed., **2**, 209-250.

Blakiston, T. and Pryer, H. (1880) Catalogue of the birds of Japan. *Trans. Asia. Soc. Japan*, **8**, 172-241.

Blakiston, T. W. and Pryer, H. (1882) Birds of Japan. *Trans. Asia. Soc. Japan*, **10**, 84-186.

*Blakiston, T. W. (1884) *Amended List of the Birds of Japan According to Geographical Distribution; with Notes Concerning Additions and Corrections since January 1882*, Taylor & Francis, London, 68 p.

江崎悌三 (1984) 南洋群島の動物学探検小史. In: “江崎悌三著作集 第一巻”, 思索社, 東京, 71-110.

橋本太郎 (1977) 坂本式動物剥製法, 北隆館, 東京, 16 pls.+xvi+248 p.

国立科学博物館 (編) (1977) 国立科学博物館百年史, 第一法規出版株式会社, 東京, 2 pls.+xiv+898 p.

*Lewis, G. (1879) *A Catalogue of Coleoptera from the Japanese Archipelago*, London, 31 p. (出版社不明)

Panning, A. (1958) Beiträge zur Geschichte des Zoologischen Staatsinstituts und Zoologischen Museum in Hamburg. *Mitt. Hamburg. Zool. Mus. Inst.*, **56**, 1-30.

Paszkowski, L. (1971) John Stanislaw Kubary — Naturalist and ethnographer of the Pacific Islands. *Proc. Roy. Zool. Soc. N. S. Wales*, **16**(2), 43-70.

Stocking, G.W., Jr. (1991) Maclay, Kubary, Malinowsky. Archetypes from the dreaming of anthropology. In: “*Colonial situations: Essays on the contextualization of ethnographic knowledge* (Stocking, G. W., Jr. ed.), University of Wisconsin Press, Madison, 9-74.

椎名仙卓 (1989) 明治博物館事始め, 思文閣出版, 京都, iv+257 p.

東京国立博物館 (編) (1973a) 東京国立博物館百年史, 東京国立博物館, 東京, 799 p.

東京国立博物館 (編) (1973b) 東京国立博物館百年史資料編, 東京国立博物館, 東京, 651 p.

上野益三 (1968) お雇い外国人 3 自然科学 鹿島出版会, 東京, 258+14 p.

ユネスコ東アジア文化センター (編) (1975) 資料御雇外国人, 小学館, 東京, 8 pls.+524 p.

彌永芳子 (1979) トーマス・W・ブラキストン伝 In: “蝦夷地の中の日本 (トーマス・W・ブラキストン著, 高倉新一郎校訂, 近藤唯一訳)”, 八木書店, 東京, 445-629.

横浜市役所 (編) (1973) 横浜市史稿産業編, 名著出版, 東京, 726 p.

(2004年8月2日受付, 2004年10月10日受理)

(付録)「クバリー氏意見書」の全文再録

明治15年(1882)年の『農商務省博物局動物録』中にある、7月26日付「六等属田中房種」起案の省内回覧文書「独逸国人『クバリー』ノ動物ニ関スル意見書」の全文をここに再録する。その際、旧漢字を当用漢字にかえ、また外国の人名・地名以外はカタカナをひらがなに直し、句読点を適宜補うなど、現代的な表記に改めた。原文の「聊(カ)」、「畜ニ」、「為メ」、「大二」、「雖モ」、「抑」はそれぞれ「いささか」、「ただに」、「ため」、「大いに」、「いえども」、「そもそも」と表記した。その他、特記せず送り仮名を現代の標準的な表記に改めた箇所がある。鍵かっこ内は再録者による注記である。なお、ここで引用した文献は本文末尾の文献表に掲載されている。



クバリー氏意見書回覧の主意

クバリー氏は独逸人にして同国ゴードフロイ博物館の命を受け、動物学研究のため数年間太平洋諸島を航歴し本年始[ママ]めて本邦に来着し、暫く滞留して本邦産動物をも穿鑿研究せんとするの懇望ある旨を以て、独逸公使より品川大輔へ向け報道ありたれば、本省に於ては互いに利益を得んと欲し、五月一日より三ヵ月間博物館に出席せんことを同氏に依頼せられたれば、爾来日々出席して博物学を研究し博物館のために大いに尽力し、別冊第一第二第三の意見書をも認めたり。其主意たる、日本国のために博物館を拡張せしめんとするに外ならず。大いに奮進して斯国博物学の隆盛を謀らんとし、尚滞在を深く希望したれども、事皆費額に関し当今の情勢には少しく適し難きを以って、本月は依頼満期なれば止むを得ず其出席を謝絶したり。其意見書の如きは後來博物館の進歩に付利益少なからずと信ぜらるるを以って、前に回覧に供し候也。



クバリー第一意見書 徳田佐一郎訳

博物館に関し意見書指出す可しとの御指揮に因り、列品に就きいささか愚見を陳述仕り候

動物部

禽類部塵埃の事

通路石灰畝[たたき]の柔脆にして、来観人の大数に堪え難きを以って、容易に破碎し美麗の小禽も之が為に石灰の塵埃に覆われ、殆んど変色せしむるに至れり。之れただに羽毛の色沢を変ぜしむるのみならず、又大いに永存に関して害あることなれば、最も毀損を注意し、一たび列品を掃除し硝子戸の間隙を密封すべし。然れども、通路の改良を得るにあらざれば幾度之を掃除するも到底徒勞に属すべし。故に板床或は敷石を最適當なりとす。然れども、事業の遠大にして容易に行い難きを以て、仮に強靱なる安価の敷物(筵等)を用いるときは、塵埃を生ずること大いに少なるべし。且速に成效[ママ]して来観人の縦覧を妨げざるべし。

毀損したる列品の事

禽類の列品中毀損のもの少なからず。速やかに其修覆[ママ]を加えざるべからず。又陳列位置の不当にして、頭部の棚に触れ尾の硝子板に支うるもの或は互いに抵触して其羽毛を損するもの等あり。是等は掃除の際、位置を変換せしむること尤も容易なり。

動物部列品札に各種の色を用いる事

附札をして一層分明ならしめば、大いに列品をして高尚ならしむべし。例えば、亜細亜産は赤色を以てし、欧羅巴産は黄色を以てし、亜米利加産は綠色を以てする等、地方によりて色を異にし、又日本産は一種特別の色を以てするとき、独り日本産禽類をして一目瞭然ならしむるのみならず、又地球上同種物の産出を比較して大いに益あるべしと信ず。

剥製方の事

ケプテイン[かつて英国陸軍大尉であったための敬称]、ブラキストン[Thomas Wright Blakiston]の話に拠れば近頃全き日本産禽類目録[Blakiston(1884)を指す]刊行の由なれば、之を以て本館列品の禽類を比較し採集品の度を量り、而して尚其不足を補うの思慮あれば、製造を今一層充分ならしめざるべからず。

博物館中に於て熟練したる剥製者を実地に使用せざれば、最も博物館の不利なる処にして列品中異様の觀をなす者往々之[後の一文字が虫喰いにより欠落]るを見て知るべし。

余は千八百七拾六年ウエマー出版マルチン氏著わす所の剥製法を最も称誉す。

館中一二の少年を選び、剥製書中緊要の部を抜粋し之に教授して、正しき列品見本を製造せしむるは甚だ容易にして其結果はただに博物館禽類部をして改良せしむるに止まらず、又遂に本館をして日本禽類見本の基礎と稱するに至るべし。

火酒浸列品の事

禽類の外諸動物に至り、來觀人の縦覽に供するは乾製を最も良とし、就中大なる列品に至りては尤も止むを得ずといえども、貴重なる魚類蝦蟹類の如きは勉めて火酒浸を要す。

列品札の事

魚類の列品札の如きは、魚の大小を問わず同大の札を用いらるるを以て、時としては其物品の半形を覆い或は其隣品の半を遮る等最も不体裁にして、大いに來觀人の縦覽を妨ぐべし。若し日本文解説に關係を生ぜざれば、禽類部に於て述べし如く異色を以て同一の小札を列品台に付けられんことを望む。

物品採集の事

本館動物部の物品を増大ならしめんと欲すれば、此際に当り一種の方法を設け館より奨励せざるべからず。然るときは只博物館物品を完全ならしむるのみならず、又海外博物館及び人民一私の採集品の交換に供する余裕の物品を得べし。余は信ず、今日にては本館に於て交換に供すべき資本なかるべしと。

未決定列品の事

列品中未決定の物品を目撃する少なからず。此等を決定するは甚だ容易なりと云う能わずといえど

も、暗然として無益に棄て置くは博物館に関し又學術上に関しても害ある所なれば、勉めて本館に於て本邦所有書籍に照し搜索決定し、全く費用上本館の支うべきなきものは宜しく適當の外国學術社へ送付して決定せしむべし。

右等の列品中、現今に於て見れば全く新発見物にして欧州諸国に知らざるもの多しといえども、漸次外人一私の採集する所となす。鑑定のため欧州に輸出さるるは疑を容れず。此時に當り、日本博物館は発見の名誉を失したるものと謂うべし。又一方より言へば、採集したる物品を後來に譲り搜索決定せんと欲するは、其時に當り尚一層搜索に困難を増すべし。故に、須臾も未詳品を不問に措くは、最も不利なる所と信ず。

動物写生の事

課中写生に従事する諸君を看ていささか愚見を吐露せざるを得ず。そもそも日本人の外貌を写生するに於て熟練したるは、余等が常に驚く所なり。然れども、此等の図は外見に拠て実物を比較するに於ては実に益あるべしといえども、今尚少しく実物の標徴即ち成立の基礎たる法則の部に注意を加えらるるにあらざれば、學術上完全の写生と稱すべからずして、名称決定等の用には適当し難かるべしと信ず。

史伝工芸部列品

博物館中、史伝工芸物品の如きは、外国人の最も注目する処なれども、不幸にして外人に解し易き付説なきを以て、來觀人をして失望せしむることただならず。願わくは短簡なる欧文解説を添えられんことを望む。然れども、硝子戸を隔てて細字の解説を一々読み下するは少しく心苦するを免かれざれば、列品に番号を付し、之に対する簡略なる欧文解説書を編纂し、列品の番号を看ては其解説を其冊中より搜索せしむべきようならば、必ず外人の來觀を盛んにし、恐らくは各自其解説書を購求するの小金を惜まず、好んで日々來場すべきは余が断じて疑いを容れざる所なり。斯の如くして、解説書刊行費の如きは暫時にして収得すべし。若し博物館に於て余が意見を採用せらるるならば、此欠点を恢復するは容易にして、余も亦喜んで之に補助すべし。之れ亦博物館を整頓せしむるの一順序にして、之を富ましむる一策なるべしと信ず。

西曆千八百八十二年 明治十五年五月 シゼ、クバリー 謹白

第二意見書

近頃外国人の日本諸動物を採集し自国に輸送し其書を編纂する実に多くして、日本に住いする余等が意外に出づるもの甚だ多し。而して此等の新版書籍は尤も博物館に欠くべからざるの書籍なれども、是迄本館に來るもの甚だ少し。斯く日本に於て乏しきも、余はベリン[ママ]のアルフリードランドエンドソン会社の古き書籍目録中に於ても、日本甲虫並びに蝶類の書四五を目撃したり。且、余は日本博物に係る外国版書籍を尽く知らんと欲して、近日書を其会社へ送り書籍目録の最新版一部の回付を依頼せんことを望む。而して向後、費用を要せずして此等の新著述のある毎に海外諸博物館より此日本国立博物館へ輸送せしめんとするには、此博物館に於ても日本文にて出版の外、又海外へ輸送し得べき

欧文日本動植物目録なり且解説書なり出版せしめ、進呈として彼等に回付するか又返礼のために送付するときは、ただに新版書籍を費用なくして得るのみならず、又海外学士の尊崇を受け、大いに交際の道を開くべし。余は尽力して之に供する日本動植物書の編纂に助手せんと欲すれども、考うるに、物品未だ完全ならざるを憾む故に、余の今日の職分は、本館の机に向うことより先ず内地を巡回採集して本館列品を増加し、重複[ママ]に係るものは海外交換に充て、而して物品完全の上充分なる日本産物目録編纂に着手しいささか博物館に尽力せんとす。

右巡回に付き、余は敢えて旅行費を要せず。余が給料中より支出して満足す。若し博物館に於て余の意見を採用さるるならば、大いに改良の道を開くべしと信ず。

[提出年月日、提出者名なし]

第三意見書

日本諸博物館中主眼と称すべき此東京博物館は今、海外諸国同種の最も声望ある博物館と同等の品級を占むるの地位に立てり。而して此尊崇すべき地位が、世人の冀望に対して海外學術諸博物館と互いに新奇を通し互いに競争して學術の進歩改良を謀るに最利益あるべき、新近の交際をなすの義務責任を負担せざるべからず。斯の如くして、甲に新奇を發明すれば乙は之に劣らずと互いに競争して一國學術進歩の標徴たる博物館を整頓せしむるにあり。而して東京博物館は美術なり工芸なり悉て日本諸學術を表する本邦枢要の博物館たれば、日本學術の進歩に就きては最大なる關係を有するの場所なり。然れば、國民よりして互いに隆盛を謀るの思慮注心なかるべからず。

此博物館が、海外諸国の最も名譽ある諸博物館と同等の品級を占むるの高尚なる地位をして空しからしめんとするには、今一大努力を要せざるべからず。余が当時在勤するの榮を辱うする動物部に於ても、自ら海外博物館動物部と互いに交接し、勉めて之と品位を同じうするの策を免れざるべし。而して今より此動物部が針路を其方位に向けらるる企てあらば、余幸甚に堪えざる所なり。

欧米諸国博物館動物部に於て第一に着手するは、自国の動物を蒐集し最も完全の地位に進ましめ、次に海外を穿鑿研究し、外国産を整頓せしむるにあり。英倫博物館、仏国巴里府植物園、来丁[レイデンとおくる]、維也納[ウイナとおくる]、伯林[ベリン[ママ]とおくる]博物館動物部の如き、皆地球上諸動物を集めて殆ど完備を致せり。就中英倫博物館目録の如きは世界中他に比類なき學術上最も完全の書冊として称せらる。

此東京博物館の如きは、創業以来年月を重ねる尚浅く、加うる、事業の創始には常に種々の免れ難き困難を生ずるを以て、未だ充分の整頓に至らざるは当然なりと言うべしといえども、自今海外人の内國を跋渉し穿鑿研究するの密なる、日本人に勝る。遙かに遠く隨いて其物品を採集したるも、遠く博物館列品の右に出でたるは、諸君の熟知する処なり。若し此博物館にして内國を穿鑿し、博物學を適用し、學術を拡張するの念を自棄するにあざれば、速やかに改良に着手せざるべからず。其一二例を挙ぐるに「プラキストン」「プラアー」合著の日本鳥類目録[326種を掲載する Blakiston and Pryer (1882)を指す；なお、この目録の初版である同(1878)は313種、その二訂版である同(1880)は325種を所収]の如き、已に所載三百二十六余の數に及び、尚多く未詳品あることを明言するに、此博物館列品の

鳥類は目下其半ばに充たず。「ルイス」の著す日本甲虫目録 [Lewis (1879) を指す] の如きも、其多き三千余種を記載すといえども、是亦其五分の一に充たず。独り甲虫鳥類のみならず、外人の日本諸動物を博採し、自国に輸送する実に夥しといえど、此博物館に於ては之を窺視するの策もなく、随いて其利益を得るの術もなし。之れ余が動物部の権位に対して最も慨嘆すべき事と信じ、いささか愚見を吐露する所以にして、若し博物館の権位が之を嘉納するあらば、大いに改良の道を開くべしと信ず。

此博物館に於て第一着手に当り最緊要の点は、已に外人研究に係る我が国諸動物の度を知るにあり。而して之を知るには、偏く外人著述の日本諸動物書を集めざるべからず。而して後、日本動物の採集に着手すべし。然るときは已に海外に知られたるもののみならず、又將に新種を発見し得べし。此時に当り、博物館動物部はただに海外国の研究を仰がざるのみならず、又自ら日本動物類の梗概を尽し、以て此学をして漸次整頓の域に進ましむるに至るべし。

第二に着手すべき緊要点は、此博物館の如き大なる博物館に於ては自国品の蒐集完きを以て整頓したりと称すべからず。漸次海外諸国の物品を採集するの策なかるべからず。之をなすの目的並びに前途の整頓は、時と忍耐を以て勉励すれば却って現時の想像よりは容易に成效 [ママ] し得べし。例えば、自国の穿鑿密なれば、随いて重複 [ママ] 品の生ずるを以て自国産を完ならしむるの外、又重複 [ママ] 品は海外交換の用に供し、傍ら外国品を蒐集し得べし。

以上陳述する主意を實行するに当り、先ず海外公私博物館其他博物学の篤志の諸人と常に官より通信を欠くべからず。就ては、二三ヶ国の国語に通達し其事務に熟練したる外人を動物部長の権下に補助員の名義を以て使用せざるべからずと信ず。之余が在勤の二ヶ月中最も等閑に看過すべからざるの念益迫るを以て愚陳する所なれば、若し博物館の権位が之を採用せらるあらば、余に外国通信補助員の職を授けられんことを望む。此等の事業の如き、実施するに於ては漸次整頓の順序に達すべきは確疑を容れざる処なり。余は、素より學術上の事務を担当し、他の事務上に於ては委任を受くるにあらざれば、毫も関係せざるべし。此時に当り、余は [ママ] 第一に着手せんとするものは、諸邦に散逸する外人著作の日本に係る諸動物書を悉く集めて以て此博物館動物部をして諸新説を感触せしむるの鋭敏なる方法を設けんとす。而して一新報を得る毎に、共に其物品を採集せんこと勉めんとす。然れども、海外と交接するに当りては一度の通信も六十日与を費さざれば結了し得ざるを以て、較 [= ほぼ] 完全なる結果を見るには多少月日を要せざるを得ざれば、余が現今の如き不定の職に於ては着手するに由なく、之に加うるに、通信の如きは最も行い難し。余切に望む、若し動物部の権位が余の言を容らるるならば、余に決定したる職分を付与されんことを。而して動物部に於て余が実行せんとする手段を鑑み、余の陳述する新事業の較 [= ほぼ] 成效 [ママ] を見るに相当したる年月、少なくとも一年間の条約 [契約] を結ばんことを望む。其他詳細の事項は、意見の採用如何を待つて陳述せんとす。

千八百八十二年七月　クバリー拜